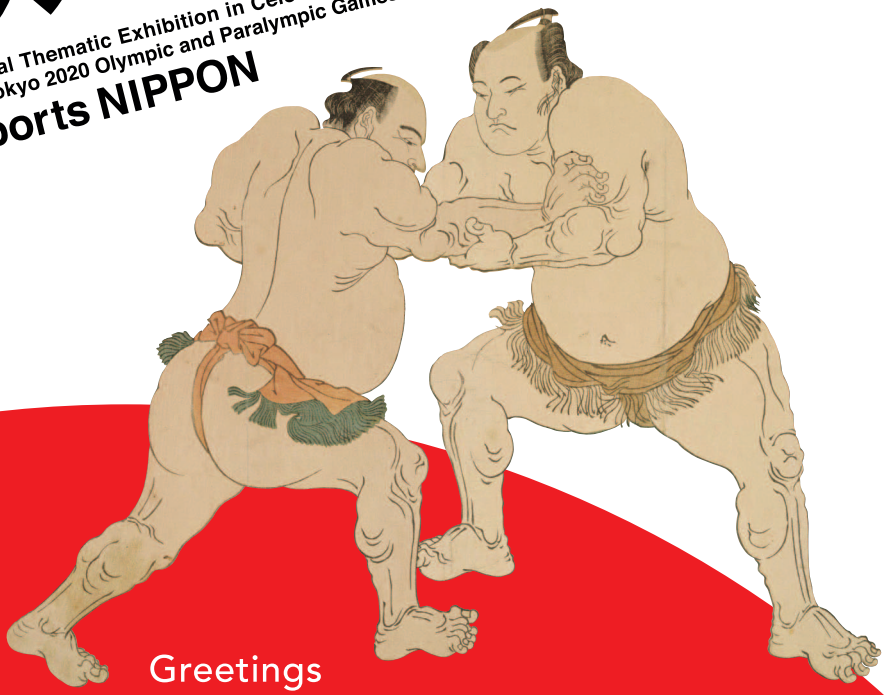
beyond 2020

東京2020オリンピック・パラリンピック開催記念
特別企画

スポーツNIPPON

Special Thematic Exhibition in Celebration of the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games

Sports NIPPON



ごあいさつ

東京2020オリンピック・パラリンピックを記念して、日本におけるスポーツの歴史と文化を紹介する展覧会を開催いたします。

本展の第1章では、東京国立博物館が所蔵する美術工芸品によって、江戸時代以前の日本スポーツの源流をたどります。そして、第2章では、秩父宮記念スポーツ博物館が所蔵する近現代スポーツ資料によって、明治時代以降の日本スポーツの発展をご覧いただきます。

世界最大規模のスポーツと文化の祭典であるオリンピック・パラリンピックが東京で開催されるこの機会に、多くの人びとに日本スポーツの歩みと魅力を知っていただくことを期待しております。本展が、日本文化の発信とさらなる発展のためのレガシー（遺産）継承の場となれば幸いです。

Greetings

This exhibition presents the history and culture of sports in Japan in commemoration of the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games.

The exhibition is divided into two parts. Chapter 1 introduces the origins of Japanese sports during the Edo period (1603–1868) and earlier through artworks and crafts from the collection of the Tokyo National Museum. Chapter 2 explores developments in Japanese sports after the Meiji Restoration of 1868 through modern and contemporary sports-related materials from the collection of the Prince Chichibu Memorial Sports Museum.

On the historic occasion of the Olympic and Paralympic Games, the world's largest celebration of sports and culture, being hosted in Tokyo, we hope to share the history and appeal of Japanese sports with a wide audience through this exhibition in order to pass on their legacy for the transmission and further development of Japanese culture.

2021年7月13日（火）～9月20日（月・祝）
東京国立博物館 平成館企画展示室

主催：東京国立博物館、秩父宮記念スポーツ博物館、読売新聞社
協力：公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
後援：公益財団法人日本オリンピック委員会

公認プログラム

TOKYO 2020
TOKYO 2020 PARALYMPIC GAMES

第1章

美術工芸にみる日本スポーツの源流

日本のスポーツの歴史は古く、原始・古代までさかのぼります。そのルーツは、貴族の宮廷行事、武士の武芸、庶民の遊戯、そして神事や芸能など多種多様であり、相撲・流鏑馬・蹴鞠といった伝統文化や、剣道・弓道などの武道として、現代まで受け継がれています。これらはまた、心身を鍛え、ルールのもとで互いの技を競い合うという意味では、現代のスポーツやオリンピック精神にも通じているといえます。第1章では、こうした江戸時代以前の日本スポーツの源流を、東京国立博物館が所蔵する絵画や工芸などの美術作品によって紹介します。

組む――相撲

相撲は、土俵で力士が組み合って戦う、日本の伝統的な格闘技です。すでに古墳時代には力士や相撲をあらわした埴輪や土器がつくられ、奈良時代の歴史書『日本書紀』には相撲の原形とみられる野見宿禰と当麻蹴速の力比べが記されています。また、相撲は格闘技であるとともに神事であることも大きな特徴で、平安時代には貴族の宮廷行事の一つとして行なわれました。そして、鎌倉時代以降は合戦のための武芸の鍛錬として武士の間に広まりました。さらに江戸時代になると、相撲は見世物やスポーツとしての性格を強め、庶民の娯楽として人気を集めました。

1 子持装飾付脚付壺
Footed Jar with Ornaments and Diminutives

古墳に副葬するための特別な土器で、細長い脚が付いた壺のまわりに小壺と小像が飾られています。とくに注目されるのが、取っ組み合う二人の人物（力士か）とそれを見ている人物（行司か）の小像です。相撲の原形となった原始・古代の格闘技をあらわしたものと考えられます。

2 武家相撲絵巻（模本） 部分
Illustrated Scroll of Samurai Sumō, Copy

平安時代の天皇即位にかかわる相撲と、鎌倉時代の源頼朝にかかわる相撲の話を描いた絵巻。原本は狩野山雪によるもの。展示場面は、小柄な伴能雄が大柄な紀名虎を投げ飛ばし、惟仁親王が皇位を継承して清和天皇となったところです。見事な群像表現にも注目です。

射る・操る――弓術・馬術

日本の合戦において、弓矢は鉄砲が登場するまでは戦場でもっとも効果的な武器でした。そして平安から鎌倉時代の合戦は、疾走する馬上から矢を放ち、的を射る騎射戦が中心でした。そのため、弓術と馬術は武士の武芸の中でもとくに重視されました。流鏑馬・笠懸・犬追物は騎射三物といわれ、平時における実戦訓練として武士社会で盛んに行なわれました。また、貴族社会においても宮廷儀式に弓術や馬術が取り入れられました。こうした歴史を通して、日本の弓術と馬術は独自の進化を遂げ、弓具や馬具、射法や騎乗法などに中国や西洋とは異なる特徴がみられるようになりました。

3 ◎男衾三郎絵巻　部分
Illustrated Scroll of Tale of Warrior Obusuma Saburō

都の生活に憧れる吉見二郎と、ひたすら武芸に励む男衾三郎、関東の兄弟武士の物語です。とくに笠懸のシーンは、歴史の教科書にもよく紹介される有名な場面です。笠懸は、走る馬の上から的に鏑矢を射る騎射技術で、流鏑馬よりも実戦的な性格が強いものでした。

5 重籐弓
Bow with Rattan Binding

日本の弓は、強度と威力を増すために木と竹を組み合わせてつくられています。合戦で用いる弓には、さらに補強と装飾のために表面に漆を塗り、籐を巻きました。重籐弓は籐巻をいくつも重ねた弓のことです。現状は弓弦を外した状態で、使用の際は、弓を押し曲げて逆に反らし、両端の弓弭に弓弦を張ります。

6 鏑矢
Whistling Arrow

鏑矢は矢柄と鏃の間に鏑を取り付けた矢です。鏑には穴があいており、射ると音が鳴り響きます。合戦開始の合図として使われ、嚆矢ともいいます。この鏑矢には、狩股と呼ばれる先が二股に分かれた鏃が使われています。狩股は目標を射切るための鏃で、矢柄が回転しないよう矢羽が四枚羽になっています。

7 犬追物図屏風
Folding Screen of *Inu ou mono* (Dog-Shooting Equestrian Archery Contest)

犬追物は、動き回る犬を馬で追いかけ、矢を当てる伝統競技です。弓術と馬術を磨く武芸の鍛錬として、中世から始まりました。射る際は先が丸い矢を使い、犬を傷つけない細工がなされていたのでご安心を。周囲の見物人の色鮮やかな風俗描写も見どころです。

参考：嘉納治五郎肖像
（写真提供：秩父宮記念スポーツ博物館）

8 ◎獅子螺鈿鞍
Saddle Tree with Lions

軍陣鞍といわれる実戦用の重厚な鞍です。本体は木製で、表面を金粉で飾る沃懸地とし、前後には表情豊かな獅子たちが夜光貝の螺鈿によって飾られています。本品は、柔道の父といわれる嘉納治五郎から東京国立博物館に寄贈されたものです。その豪華で力強い造形は、彼の美意識に通じるものだったのでしょう。

蹴る――蹴鞠

蹴鞠は、革製の鞠を一定の高さで蹴り上げて、地面に落とさないよう数人で受け渡していく遊戯です。勝ち負けを競うものではなく、蹴り方や動きの優雅さが重要な見どころとされます。仏教などとともに中国から伝わったとされ、平安時代には貴族の間で盛んに行なわれるようになり、蹴鞠の名手や名家が生まれました。鎌倉時代には上級武士にも広まって、和歌や茶の湯などとともに武士のたしなみとされました。江戸時代になると、文化的な娯楽として裕福な町民層にも親しまれるようになり、作法や装束などさまざまなルールが整えられました。

10 鞠靴
Shoes for *Kemari*

9 鞠装束 紅遠菱文
Costume for *Kemari* Design of Lozenges on Red Ground

江戸時代には、蹴鞠の装束として、鞠水干といわれる上衣と、葛布で仕立てた葛袴を着用することが定められました。また、蹴鞠の免許に応じて使用できる文様や色に規則がありました。鞠靴（No. 10）は蹴鞠用の革靴で、鞠を蹴りやすいように先端を鴨のくちばしに似せているので鴨靴ともいわれます。

11 蹴鞠
Balls for *Kemari*

蹴鞠に使われる鞠は、円形の鹿革2枚を馬革で縫い合わせて中空の球形にしたもので、大きさは直径20cm前後、重さは120gほどです。本品は飾り用の鞠で、一つは表面に胡粉を塗って白くし、もう一つは金箔と銀箔で金銀に飾られており、菊花を描いた専用の台に載せて紫の組紐で結んでいます。

12 なよ竹物語絵巻（模本） 部分
Illustrated Scroll of *Nayotake Monogatari* (Story about the Beautiful Wife of a Court Noble Loved by the Emperor), Copy

13 年中行事絵巻（模本） 部分
Illustrated Scroll of Annual Events, Copy

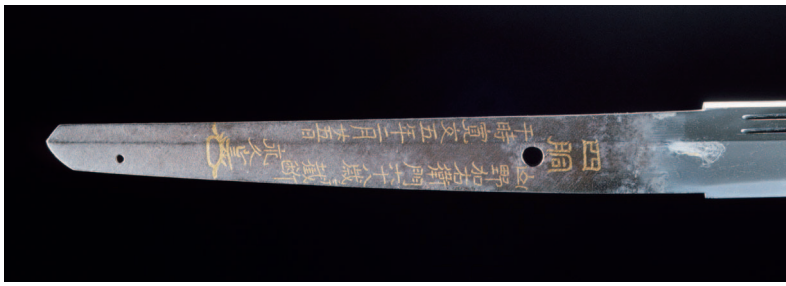
平安時代末期の宮中や貴族の邸宅などで行なわれた、さまざまな行事や儀式などを描いた絵巻。本巻には、ある庭で行なわれた蹴鞠の様子が描かれています。四隅に植えられた木の内側でプレーするのがルールで、高く蹴り上げた鞠を追う姿が生き生きと描写されています。

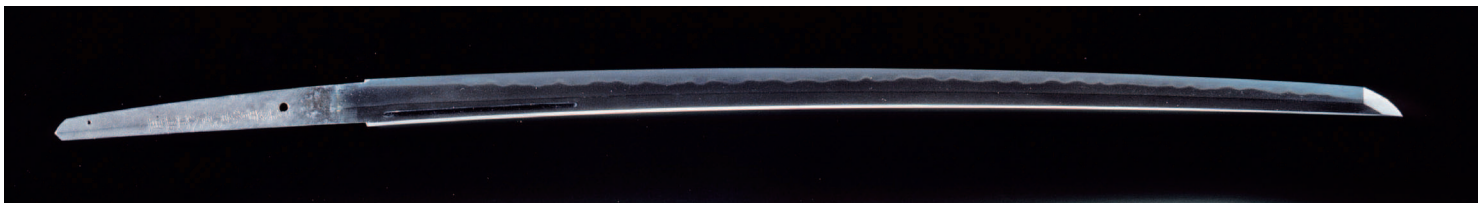
切る・突く――剣術

日本独自の刀剣である日本刀は、武士が歴史に登場する平安時代後期（11世紀）に誕生し、刀剣を自在に操るための剣術もその頃から発達したと考えられます。大規模な戦乱が全国に広がった室町時代後期（戦国時代）には、より実戦的な剣技を体系化した剣術流派が生まれ、その理念や奥義を図解した秘伝書がまとめられるようになりました。天下泰平となった江戸時代においても刀剣は武士の象徴であり、心身の鍛錬としての性格を強めつつ、さまざまな剣術流派が派生しました。また、実際に刀剣を使う機会が少なくなったことから、試し切りによる刀剣の評価も行なわれました。

14 刀　長曽祢虎徹
Long Sword (*katana*) by Nagasone Kotetsu

優れた切れ味で名高い長曽祢虎徹の刀です。よく鍛えられた刀身に明るく冴えた刃文を焼入れています。茎には「四胴」の金象嵌銘があり、試し切りの名手であった山野加右衛門が、この刀で罪人の遺体4体を重ね切りしたことが記されています。





15 愛洲陰流伝書　部分
Teachings of the Aisu Kage School of Swordsmanship

愛洲陰流は、室町時代に伊勢国（三重県）の愛洲移香斎久忠が編み出した剣術流派です。陰流（影流）ともいい、新道流・念流とともに兵法三大源流の一つとされます。本品はその秘伝書で、「猿飛」「猿廻」「山陰」「月陰」「浮舟」など、さまざまな剣技が図示されています。

16 北斎漫画
Hokusai Manga

北斎漫画は、江戸時代を代表する浮世絵師の一人、葛飾北斎による絵手本（スケッチ画帳）です。全15編あり、人物、動植物、風景、器物、建物、妖怪などさまざまなものが取り上げられています。この場面では、剣術や槍術などの武芸が描かれており、江戸時代の剣術稽古の様子や道具がよくわかります。

17 加治ケ浜 関の戸 行司木村庄之助
Sumō Wrestlers Kajigahama, Sekinoto, and Referee Kimura Shōnosuke

21 追羽子
Battledore and Shuttlecock

浮世絵にみる日本のスポーツ

江戸の町人文化を代表する浮世絵は、美人画や役者絵以外にも、多彩な題材を取り扱っていました。とりわけ江戸時代に一大スポーツ興行として発展した相撲は、浮世絵の主要ジャンルを形成しています。江戸後期には、さらに画題のヴァリエーションは広がりをみせ、古今東西のさまざまな文化や習俗、各地の風景や歴史的な出来事などを描きあらわしていきました。ここでは、身体能力を活かした遊びや仕事、武芸に秀でた歴史的人物などを描いた浮世絵作品を通して、前近代における日本のスポーツ文化をたどってみたいと思います。

22 其面影程能写絵 弁けい
Benkei Carrying a Temple Bell

23 牛若丸綱渡り
Ushiwakamaru Walking a Tightrope

18 諸国名所風景 相州 江島 漁船
Views of Famous Places in Various Provinces: Fishing Boat at Enoshima, Sagami Province

20 東海道五拾三次之内 平塚 縄手道
The Fifty-Three Stations of the Tōkaidō: Path between Rice Fields at Hiratsuka

19 義経一代記之内 間道に趣て 義経 鵯越の嶮峻難所をよじ登る
Biographical Story of Yoshitsune: Yoshitsune Clims a Perilous Route up Hiyodorigoe

24 風俗女水滸伝 かわらけ投げ
Fashionable Women as Heroes of "The Water Margin": Throwing Earthenware

第2章

近現代の日本スポーツとオリンピック

第２章では、近代から現在に至るまでの日本スポーツの歩みを取り上げます。第１章でみたように、日本には古くから伝統的な文化と密接に結びついた「スポーツの源流」というべき、身体を伴うさまざまな活動がありました。明治以降、「スポーツ」という概念が海外より受容されます。とくに、オリンピックは日本にスポーツを普及・啓発する上で重要な役割を果たしました。ここでは、日本における初期のスポーツ用具や用品、オリンピックへの参加、そして招致・開催を実現していった過程を、秩父宮記念スポーツ博物館の所蔵資料から紹介します。

戦前の日本スポーツ界

大正後期から昭和初期は、戦前におけるスポーツ全盛の時代でした。第一次世界大戦後、ナショナリズムの高揚や国民の体力向上が意識され、日本のスポーツが興隆します。1923（大正12）年に起きた関東大震災後の復興期にあたる1924（大正13）年には、東京オリンピック大会開催を想定した本格的な競技施設として、明治神宮外苑競技場が整備され、政府による全国体育デーが制定されました。また、1932年ロサンゼルス大会の水泳で、日本は男子6種目中5種目で金メダルを獲得し、水泳は日本のお家芸と呼ばれました。

25 マラソン足袋
Long-Distance Running Shoes

日本初のオリンピックマラソン選手、金栗四三は、布製の足袋でストックホルムの石畳を走り苦労したことから、運動具店の店主と改良を進めました。丈は短く、足底はゴム底で、こはぜ留めから甲で紐を結ぶ形へ変化し、戦前に日本のマラソン選手の多くが使用しました。

26 三島弥彦　陸上ユニフォーム、シューズ
Track-and-Field Uniform and Shoes Worn by Mishima Yahiko

日本が初参加した1912年ストックホルム大会で、陸上競技400m走などに出場した三島弥彦のランニングシャツとスパイクシューズです。スパイクシューズはサイズ24cmで、靴底には長さ15mmのスパイクピンが並んでいます。当時の陸上トラックは土だったため、しっかりと地面をとらえる頑丈なピンになっています。

27 1932年ロサンゼルス大会日本代表水着
Uniform of the Japanese Swimming Team at the 1932 Olympics in Los Angeles

当時、水着の形は男女とも「上下続きのもの」と競泳規則で定められていました。1932年ロサンゼルス大会の水泳で日本は男子全6種目中5種目で金メダル、女子は200m平泳ぎの前畑秀子が銀メダルと大活躍。水泳は日本のお家芸と呼ばれるようになります。

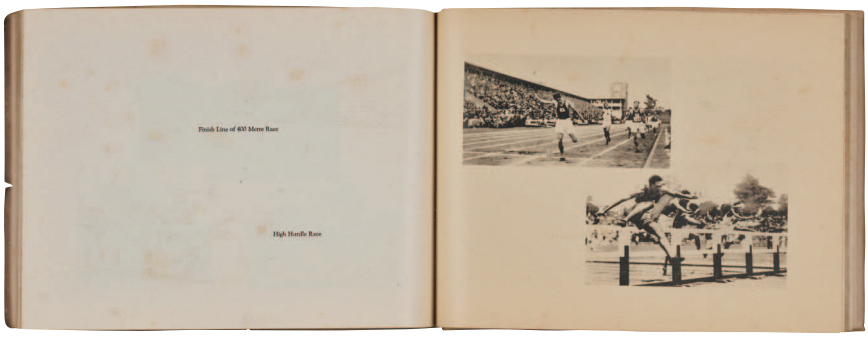
東京オリンピック招致

東京のオリンピック招致活動は1940年大会が最初です。1940（昭和15）年は皇紀2600年にあたり、日本の節目の年に国威を発揚すること、1923年の関東大震災から復興した近代都市東京を世界にアピールすることがおもな端緒でした。しかし、日中戦争の激化により、1938（昭和13）年7月、大会を返上します。戦後は、1960年大会を東京に招致すべく「スポーツ精神の交流によって恒久平和の確立に寄与すること」を主張します。1960年大会はローマに決まりますが、その４年後の1964年大会は東京に決定し、アジア初のオリンピックを開催します。

参考：1940年東京大会ポスター（入賞作品）
『第十二回オリンピック東京大会組織委員会報告書』（1939年）所収

28 ◎埴輪（はにわ）　短甲（たんこう）の武人（ぶじん）
Tomb Sculpture *Haniwa*: Warrior in *Tankō* Armor

埴輪とは、おもに古墳のまわりに飾られた焼き物です。本品は短甲といわれる甲冑（かっちゅう）を着用した古墳時代の武人をあらわした埴輪で、当時の武装がリアルに表現された貴重な考古資料です。また、その優れた造形から、1940年に開催予定であった幻の東京大会のポスターデザインに採用されました。



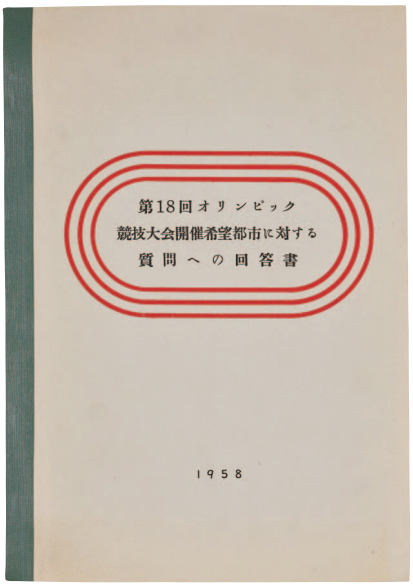
29 1940年東京大会（ねんとうきょうたいかい）　招致（しょうち）ファイル
Bidding File for the 1940 Olympics in Tokyo

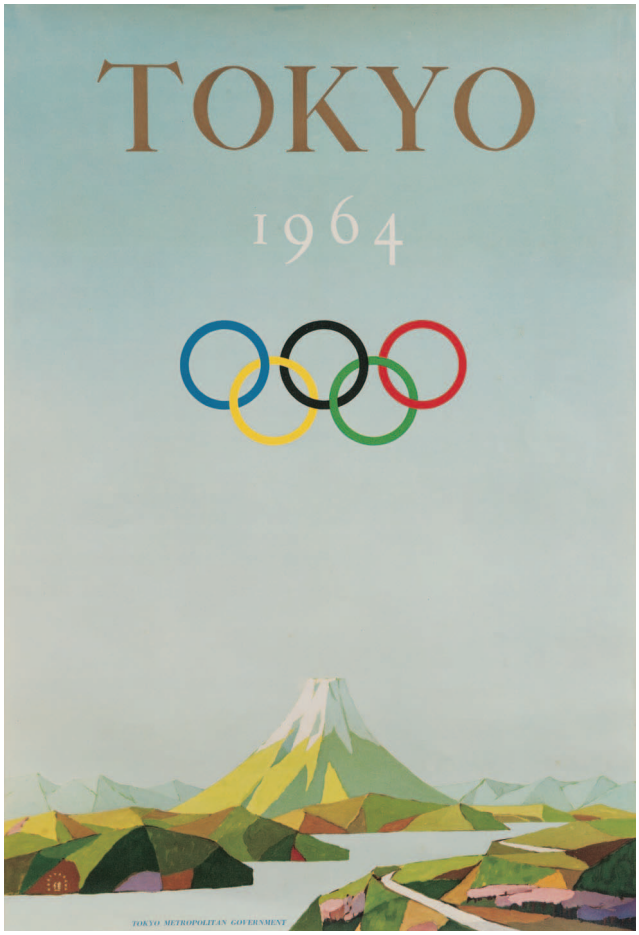
1940年大会の開催地に東京が立候補する表明文や競技施設などの写真を掲載しています。1936（昭和11）年7月の国際オリンピック委員会（IOC）総会で東京が開催都市に選ばれますが、日中戦争の激化により、1938年7月、日本政府は大会返上を決定しました。

30 1964年東京大会　招致用アルバム「東京」
Bidding Album "Tokyo" for the 1964 Olympics in Tokyo

31 『第18回オリンピック競技大会開催希望都市に対する質問への回答書』および附図
Responses to Questions for Prospective Host Cities of the Games of the 18th Olympiad and Attached Diagrams

1964年東京大会招致の資料。アルバム（No. 30）は競技施設などを写真で紹介したもので、アジア初のオリンピック開催を日本国民が切望していると東龍太郎東京都知事が説明しています。回答書（No. 31）は、大会運営などに関する国際オリンピック委員会（IOC）の質問に対して、日本が予定している体制を説明しています。



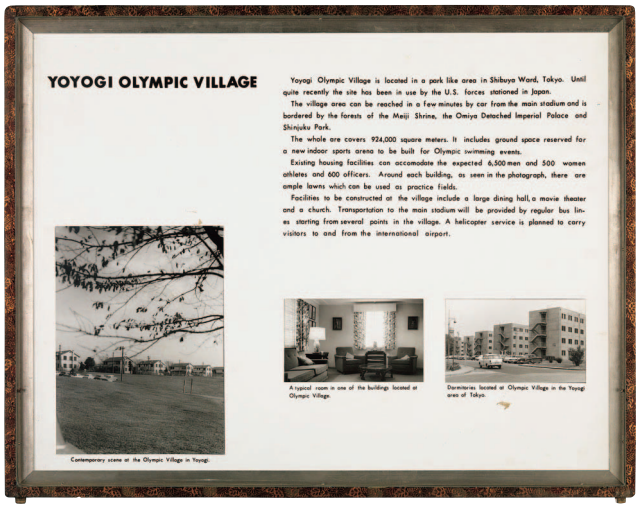


32 1964年東京大会　招致ポスター（富士山）
Bidding Poster for the 1964 Olympics in Tokyo (Mount Fuji)

1964年大会の開催地に東京が立候補して作成された招致ポスターです。日本の象徴である富士山に五輪マークを配したもので、原画は栗谷川健一が担当しました。栗谷川は北海道出身の画家で、後に1972年札幌冬季大会の招致ポスターも手がけました。

33 1964年東京大会　代々木選手村模型
Model of Yoyogi Olympic Village for the 1964 Olympics in Tokyo

1964年東京大会の選手村は、国立競技場に近く利便性の高かった、アメリカ軍の居住地「ワシントンハイツ」につくられました。日本へ返還後、「代々木選手村」と名付けられ、既存の木造住宅や鉄筋アパートを修築して選手、役員の宿舎に使用しました。



蓋裏面

1964年東京オリンピック

幻となった1940年大会以来、東京でのオリンピック開催は日本の悲願でした。第二次世界大戦の敗戦から経済復興を成し遂げた日本は、あらためて東京大会の実現をめざし、1959（昭和34）年のIOC総会で1964年大会の開催地として選出されました。その後、競技施設や新幹線をはじめとする交通網などが急ピッチで整備され、1964（昭和39）年10月10日、アジアで初めてとなるオリンピックが開会しました。参加国は過去最高となる94か国に上り、正式競技に加わった柔道とバレーボールを含む20競技、公開競技の男子野球、デモンストレーションとして武道が行なわれました。

34 1964年東京大会　聖火トーチ、ホルダー

Olympic Torch and Its Holder for the 1964 Olympics in Tokyo

1964年東京大会で使われた聖火トーチです。火薬を詰めた円筒のトーチ部分を、黒いアルミ合金のホルダーに差して使用されました。トーチは、点火しやすく、消えにくく、安全に処理できることが求められました。ホルダーは工業デザイナーの柳宗理による設計です。

36 1964年東京大会 日本選手団 デレゲーション ユニフォーム（小野喬着用）

Japanese Olympic Delegation Uniform for the 1964 Olympics in Tokyo (Worn by Gymnast Ono Takashi)

1964年東京大会で、開会式の入場行進で着用する日本選手団の正装として採用されたのは、赤色のブレザーと白のボトムスという「日の丸」をイメージさせる組み合わせでした。本資料は、選手団の主将で選手宣誓を務めた小野喬が実際に着用したユニフォームです。

35 1964年東京大会　聖火ランナー用シャツ、パンツ（男性用）

Shirt and Pants for Runners in the Olympic Torch Relay for the 1964 Olympics in Tokyo (Men's)

聖火リレーの走者には、男性はランニング、女性は三分袖シャツに、パンツとシューズが支給されました。シャツとパンツはポリプロピレン混紡糸で、白の清潔さを印象づけました。都道府県ごとに16～20歳の正走者と副走者、随走者で一区間の隊が構成されました。

37 1964年東京大会　メダル授与式着用振袖（松坂屋）

Furisode (Long-Sleeved Kimono) Worn for Medal Ceremonies at the 1964 Olympics in Tokyo (Provided by Matsuzakaya Department Store)

1964年東京大会の表彰式では、振袖姿の女性補助要員が、漆塗りの盆でメダルを運びました。彼女たちが着用した振袖と帯は、東西の代表的な百貨店が製作した特注品でした。五輪マークの刺繍をあしらう斬新な意匠と、伝統的な和装の優美さが世界の注目を集めました。

参考：1964年東京大会　女子体操　チャスラフスカの跳馬の演技（写真提供：読売新聞社）

38 ベラ・チャスラフスカ（旧チェコスロバキア女子体操選手）ユニフォーム

Uniform Worn by Věra Čáslavská (Czechoslovak Gymnast)

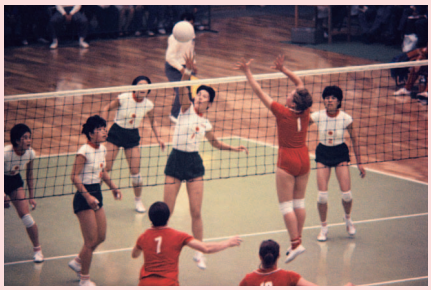
女子体操個人総合で金メダルを獲得したベラ・チャスラフスカ（現チェコ共和国）選手のユニフォームです。ラリサ・ラチニナ（現ウクライナ）選手のオリンピック３連覇を阻んだ彼女の優雅な演技は大きな話題となり、「五輪の名花」などと呼ばれて人びとを魅了しました。

参考：1964年東京大会　男子棒高跳決勝
ハンセンが5m10をクリアした瞬間
（写真提供：読売新聞社）

39 フレッド・ハンセン（アメリカ男子棒高跳選手）シューズ

Shoes Worn by Fred Hansen (American Pole Vaulter)

陸上男子棒高跳では、グラスファイバー製ポールの採用で好記録が続出し、フレッド・ハンセン（アメリカ）がヴォルフガング・ラインハルト（ドイツ）との9時間に及ぶ激闘の末、5m10のオリンピック新記録で優勝しました。本資料はハンセンが競技で実際に履いたシューズです。



参考：1964年東京大会
女子バレーボール決勝
日本対ソ連
（写真提供：読売新聞社）

40 1964年東京大会　バレーボール公式球（使用済・未使用）

Official Balls for Volleyball at the 1964 Olympics in Tokyo (Used / Unused)

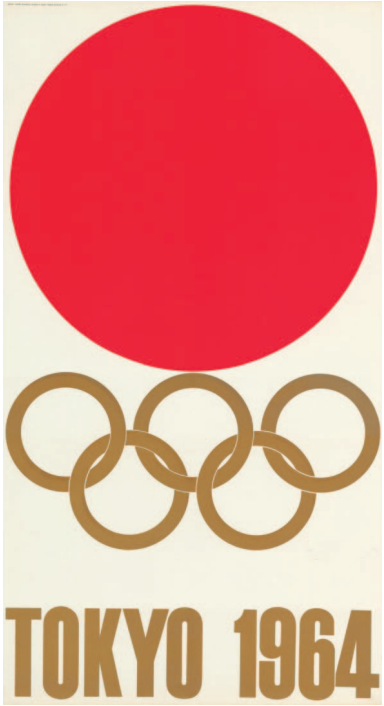
バレーボールは1964年東京大会で初めて正式種目に採用されました。「東洋の魔女」と呼ばれた女子日本代表チームは、ライバルのソビエト連邦（当時）と決勝を戦い、金メダルを獲得しました。二つのボールは当時の公式球で、右は未使用、左は実際に使用されたボールです。

41 1964年東京大会　サッカー公式球（晴天用・雨天用）

Official Balls for Football at the 1964 Olympics in Tokyo (Fair Weather / Rain)

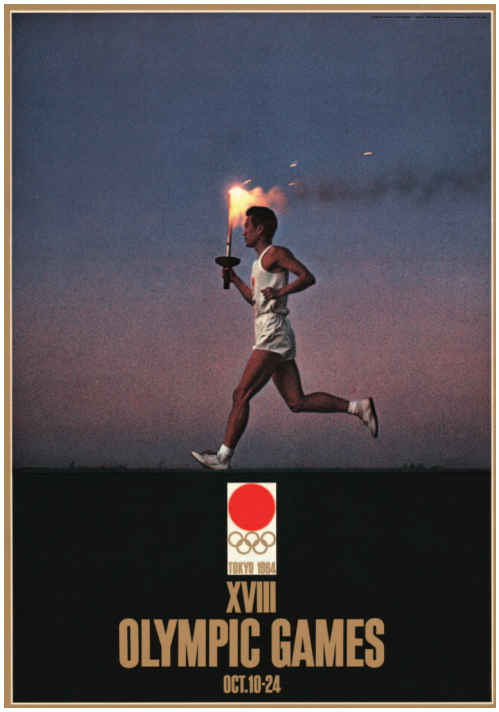
これらはともに1964年東京大会で使用された公式のサッカーボールです。通常の試合では茶色のボール（左）が、視認性が低下する雨天時には黄色のボール（右）が使われました。東京大会で日本代表チームは、強豪アルゼンチンを逆転で破るという快挙を成し遂げ話題になりました。

2 号：1962年



1 号：1961年

3 号：1963年



4 号：1964年

オリンピックのポスター

近代オリンピックは、スポーツ以外にも競技にまつわる芸術活動を重視してきました。初期には音楽や舞踏のプログラムが主でしたが、ポスターやメダルの造形性が競われ、やがて大会運営そのものに芸術家やデザイナーが関与するようになりました。1964年東京大会では勝見勝（かつみまさる）を座長にしたデザイン懇談会が組織され、大会の統一デザインをリードしました。ポスターを担った亀倉雄策（かめくらゆうさく）は、シンボルマークによる 1 号ポスターのほか、写真を全面に用いた 3 種のグラビア多色刷公式ポスターを発表しました。これは歴代オリンピックでは前例のない試みでした。

42 1964年東京大会（ねんとうきょうたいかい）公式（こうしき）ポスター（1～4号（ごう））

Official Posters for the 1964 Olympics in Tokyo (Nos. 1–4)

1960（昭和35）年に亀倉雄策が1964年東京大会のシンボルマークをデザインし、翌年これを用いた第 1 号ポスターを、さらに 2 号から 4 号を順次発表しました。撮影はいずれも早崎治（はやさきおさむ）で、2 号ではアメリカと日本の陸上選手が、3 号と 4 号では日本の大学生選手がモデルに起用されました。

オリンピックのメダル

日本が初めてオリンピックに参加したのは、1912年ストックホルム大会（スウェーデン）です。この大会では嘉納治五郎が団長を務め、三島弥彦と金栗四三が陸上競技に参加しました。初めてのオリンピックメダルの獲得は、1920年アントワープ大会（ベルギー）におけるテニス・シングルスの熊谷一弥となります。その後、戦争による中断を挟みつつ、オリンピック出場を目指して選手たちは努力を重ねてきました。このコーナーでは、その選手たちの活躍の一端を紹介します。

43 熊谷一弥・柏尾誠一郎（テニス）
銀メダル　1920年アントワープ大会
Silver Medal Won by Kumagai Ichiya and Kashio Seiichirō (Tennis) at the 1920 Olympics in Antwerp

44 内藤克俊（レスリング）
銅メダル　1924年パリ大会
Bronze Medal Won by Naitō Katsutoshi (Wrestling) at the 1924 Olympics in Paris

46 大江季雄・西田修平（棒高跳）
友情のメダル
1936年ベルリン大会
"Friendship Medal" Won by Ōe Sueo and Nishida Shūhei (Pole Vault) at the 1936 Olympics in Berlin

1936年ベルリン大会のメダル。棒高跳に出場した西田修平と大江季雄は、2位・3位の決定戦を日本人同士で争うことをやめ、帰国後に西田の銀と大江の銅を半分ずつつないで分け合ったことから「友情のメダル」と呼ばれています。

45 織田幹雄（三段跳）　金メダル
1928年アムステルダム大会
Gold Medal Won by Oda Mikio (Triple Jump) at the 1928 Olympics in Amsterdam

47 猪谷千春（アルペンスキー）　銀メダル
1956年ダンペッツォ冬季大会
Silver Medal Won by Igaya Chiharu (Alpine Skiing) at the 1956 Winter Olympics in Cortina d'Ampezzo

48 1964年東京大会　金・銀・銅メダル
Gold, Silver, and Bronze Medals from the 1964 Olympics in Tokyo

表面には月桂冠を掲げる勝利の女神像、裏面には胴上げされる優勝者が描かれています。小柴利孝が原型を制作し、リボンには西陣織の5色の絹織が使われています。

49 1972年札幌冬季大会　金・銀・銅メダル
Gold, Silver, and Bronze Medals from the 1972 Winter Olympics in Sapporo

デザインは田中一光。メダル右下の楕円がスケートリンク、縦の曲線がスキーのシュプール（滑降の跡）を表現しています。スキージャンプ70m級では、日本勢が金・銀・銅を独占し、「日の丸飛行隊」の名を国内外に知らしめました。

50 1998年長野冬季大会　金・銀・銅メダル
Gold, Silver, and Bronze Medals from the 1998 Winter Olympics in Nagano

ベースは長野県の伝統工芸の木曽漆でつくられ、篠塚正典がデザインしたエンブレム「スノーフラワー」が七宝焼で描かれています。

展示作品リスト

◎：重要文化財
東：東京国立博物館所蔵、秩：秩父宮記念スポーツ博物館所蔵　＊個人蔵（秩父宮記念スポーツ博物館寄託）

No.	指定	名称	時代・世紀	備考	所蔵
1		子持装飾付脚付壺	古墳時代・6世紀	岡山県瀬戸内市牛窓町木槌ヶ谷出土	東
2		武家相撲絵巻（模本）	江戸時代・天保11年（1840）	三村晴山、井上昆得、岩崎信盈模 原本：狩野山雪筆　江戸時代・17世紀	東
3	◎	男衾三郎絵巻	鎌倉時代・13世紀		東
4		男衾三郎絵巻（模本）	江戸時代・文化13年（1816）	狩野晴川院養信ほか模	東
5		重籐弓	江戸時代・19世紀	世良田基氏寄贈	東
6		鏑矢	江戸時代・19世紀		東
7		犬追物図屏風	江戸時代・17世紀		東
8	◎	獅子螺鈿鞍	平安～鎌倉時代・12～13世紀	嘉納治五郎氏寄贈	東
9		鞠装束　紅遠菱文	江戸時代・19世紀		東
10		鞠靴	江戸時代・19世紀	関保之助氏寄贈	東
11		蹴鞠	江戸時代・19世紀		東
12		なよ竹物語絵巻（模本）	江戸時代・19世紀	狩野晴川院養信模　原本：鎌倉時代・14世紀	東
13		年中行事絵巻（模本）	江戸時代・19世紀	原本：平安時代・12世紀	東
14		刀　長曽祢虎徹	江戸時代・17世紀	長曽祢虎徹作	東
15		愛洲陰流伝書	室町時代・16世紀写		東
16		北斎漫画	江戸時代・19世紀	葛飾北斎筆	東
17		加治ケ浜 関の戸 行司木村庄之助	江戸時代・天明4年（1784）	勝川春章筆	東
18		諸国名所風景 相州 江島 漁船	江戸時代・19世紀	二代喜多川歌麿筆	東
19		義経一代記之内 間道に趣て義経鵯越の嶮峻難所をよじ登る	江戸時代・19世紀	歌川広重筆	東
20		東海道五拾三次之内 平塚 縄手道	江戸時代・19世紀	歌川広重筆	東
21		追羽子	江戸時代・18世紀	石川豊信筆	東
22		其面影程能写絵 弁けい	江戸時代・19世紀	歌川国芳筆	東
23		牛若丸綱渡り	江戸時代・19世紀	二代喜多川歌麿筆	東
24		風俗女水滸伝 かわらけ投げ	江戸時代・19世紀	歌川国芳筆	東
25		マラソン足袋	明治～大正時代・20世紀		秩
26		三島弥彦　陸上ユニフォーム、シューズ	明治45年（1912）		秩
27		1932年ロサンゼルス大会　日本代表水着	昭和7年（1932）		秩
28	◎	埴輪　短甲の武人	古墳時代・6世紀	埼玉県熊谷市上中条出土	東
29		1940年東京大会　招致ファイル	昭和11年（1936）		秩
30		1964年東京大会　招致用アルバム「東京」	昭和34年（1959）		秩
31		『第18回オリンピック競技大会開催希望都市に対する質問への回答書』および附図	昭和33年（1958）		秩
32		1964年東京大会　招致ポスター（富士山）	昭和34年（1959）		秩
33		1964年東京大会　代々木選手村模型	昭和37年（1962）		秩
34		1964年東京大会　聖火トーチ、ホルダー	昭和39年（1964）		秩
35		1964年東京大会　聖火ランナー用シャツ、パンツ（男性用）	昭和39年（1964）		秩
36		1964年東京大会　日本選手団デレゲーションユニフォーム（小野喬着用）	昭和39年（1964）		秩
37		1964年東京大会　メダル授与式着用振袖（松坂屋）	昭和39年（1964）		秩
38		ベラ・チャスラフスカ（旧チェコスロバキア女子体操選手）　ユニフォーム	昭和39年（1964）		秩
39		フレッド・ハンセン（アメリカ男子棒高跳選手）　シューズ	昭和39年（1964）		秩
40		1964年東京大会　バレーボール公式球（使用済・未使用）	昭和39年（1964）		秩
41		1964年東京大会　サッカー公式球（晴天用・雨天用）	昭和39年（1964）		秩
42		1964年東京大会　公式ポスター（１～４号）	昭和36～39年（1961～64）		秩
43		熊谷一弥・柏尾誠一郎（テニス）　銀メダル　1920年アントワープ大会	大正9年（1920）		秩
44		内藤克俊（レスリング）　銅メダル　1924年パリ大会	大正13年（1924）		秩
45		織田幹雄（三段跳）　金メダル　1928年アムステルダム大会	昭和3年（1928）		＊
46		大江季雄・西田修平（棒高跳）　友情のメダル　1936年ベルリン大会	昭和11年（1936）		秩
47		猪谷千春（アルペンスキー）　銀メダル　1956年ダンペッツォ冬季大会	昭和31年（1956）		秩
48		1964年東京大会　金・銀・銅メダル	昭和39年（1964）		秩
49		1972年札幌冬季大会　金・銀・銅メダル	昭和47年（1972）		秩
50		1998年長野冬季大会　金・銀・銅メダル	平成10年（1998）		秩

秩父宮記念スポーツ博物館の紹介

秩父宮記念スポーツ博物館（ちちぶのみやきねんすぽーつはくぶつかん）は、1959年１月、旧国立競技場内に開設された日本で唯一の総合スポーツ博物館です。秩父宮雍仁親王（やすひとしんのう）（1902～53）の名を冠した当館は、明治から大正・昭和と、日本のスポーツの黎明期に自らスポーツに親しみ、スポーツの普及に努めた秩父宮の功績を継承し、スポーツの歴史と文化を普及するため、さまざまなスポーツ関係資料の収集・保存・公開を行なってきました。また、併設の図書館は、スポーツに関する書籍、雑誌等を揃えた専門図書館として、一般の愛好者から研究者まで多くの方に利用されてきました。2014（平成26）年６月からは、国立競技場建設工事に伴って、東京都足立区綾瀬に事務所と収蔵庫・書庫を仮移設しています。

東京2020オリンピック・パラリンピック開催記念 特別企画
スポーツNIPPON

2021（令和3）年7月13日発行
執筆：佐藤寛介、高橋真作（以上、東京国立博物館）、
青木祐一、木村一貫、新名佐知子
（以上、秩父宮記念スポーツ博物館）
翻訳：株式会社 イデア・インスティテュート
撮影：藤瀬雄輔（東京国立博物館）ほか
ロゴデザイン：村松丈彦（むDESIGN室）
デザイン・制作：カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社
美術出版デザインセンター
編集・発行：東京国立博物館、秩父宮記念スポーツ博物館

©2021東京国立博物館 Tokyo National Museum、秩父宮記念スポーツ博物館 Prince Chichibu Memorial Sports Museum

（表紙作品）No. 3, 17, 34, 35, 48